

わが心の遍歴

(6) 宗教と現代の臓器移植の問題

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学、'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教哲学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学、'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年師家(しけ)の印可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キュルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

1. 四つの思惟のパラダイムと一つの「絶対無」(「非思量の思量」)のパラダイム

現代における脳死による臓器移植の問題を考察することは、現在の段階においては未だ大変難しいことと考えられる。そこで、この問題を考察するに際して、一つの試みとして考察の場を幾つかに分けて考えてみたいと思う。色々の出来事は、その出来事がどのような「思惟の場」としての「パラダイム」において考えられているかによって、様々に解釈される。そこで、ここでは「出来事」において開けている場(=開け)を、まず、存在(以下、「有」と表現)の場と「無」の場とに分け、更に、有の場を絶対有の場と相対有の場とに分け、また無の場を絶対無の場と相対無の場とに分け、更に有と無との相対的な場と絶対的な場の両者が消失した場(開け)を虚無の場と名づけると、パラダイムは五つとなる。西欧の伝統的形而上学には、上に述べた思惟の場としての相対有、相対無、絶対有、虚無の四つのパラダイムがあるが、西欧と東洋、哲学と宗教、仏教とキリスト教等々の二元性、両極性の根源から改めて、現代に相応しい仕方で、脳死や臓器移植の問題を再考察するに当たって思惟の場ではなく、いわば「非思量の思量」の「開け」とでも表現できるような「絶対無」という五番目のパラダイムを追加したいと考える。

これら五つのパラダイムが想定されると、脳死による臓器移植の問題の理解が容易となると考えられる。これらは、単純なものから複雑なものへと並べると、次のようである。

- ① 相対有 (例えば、やがては朽ち果てて行く無常なこの世のもの。西欧の伝統的形而上学における有や諸科学の立場等々)
- ② 相対無 (例えば、実存思想や実存哲学の核心的概念となる不安や絶望や罪意識等々)
- ③ 絶対有 (例えば、伝統的な西欧の形而上学におけるイデア、ウジア、エイドス等々やキリスト教のある時期における、永遠、普遍、不変の絶対人格としての神等々)
- ④ 虚無 (例えば、ニーチェやサルトルにおける虚無等々)
- ⑤ 絶対無 (例えば、西田哲学における「絶対無の哲学」や西谷啓治の「空の哲学」の立場等々。また、仏教における「色即空 空即色」の立場に基礎をおく「空」とか「縁起」の立場

や、ホワイトヘッドの神の立場等々)。

2. 宗教的いのちによる愛や慈悲の行為としての脳死による臓器移植

上で新しく分類した五つのパラダイムのうち、第四番目迄には脳死による臓器移植には決定的に難しい問題はなさそうである。しかし、第五番目の絶対無のパラダイムにおいて一切を改めて考え直し、理解し直してみると、この問題は、それ程簡単に解決出来ないと考えられるのである。何故ならば、絶対無のパラダイムにおいては、一切の両極性、二元性、二項対立性は、絶対対立し、矛盾しながらにはあるが、心身一如に生きる身体的自己においては自己同一的に(西田の用語では「絶対矛盾的自己同一的に」)成り立つのであるから。絶対無においては、本誌でも以前に述べたように、一切の一切が絶対の中心であると同時に、世界(歴史的生命)を可能にする一表現点(単なる周辺)でしかない。従って、森羅万象の一切の自己と世界(歴史的生命)とは、身体的自己では自己同一的に成りたっている。従って、心身一如の身体的自己の精神的、宗教的いのちが他己へと解体されて個が解消されることは、生死を越えた次元でも、また同時に生死の次元においても許されないと考えられる。生死即涅槃の世界が可能である絶対無の開け(西田哲学で「開け」ではなくて、「場所」と表現される)では、脳死による臓器の移植は友情や愛や慈悲や恩寵によってのみ可能であるに過ぎないと理解される。絶対無のパラダイムの未だない欧米では脳死による臓器移植は当然であるかもしれない。しかし、絶対無のパラダイムが「いにしえ」から生きている日本で、脳死による臓器移植が余り進まない事実には、当然の根拠があるように思われる。絶対無がパラダイムとなる限り、脳死による臓器移植は愛や慈悲による例外としてのみ許されると考えられる。何故なら、個の自己が、神や絶対無や他己に解消されることは本来的には不可能であるからなのである。

生命が、物質的、生物的、動物の段階で考えられるならば、脳死も、物質的、生物的、動物の段階と同レベルで取り扱われるこ



1992年8月ロサンゼルス市の禅寺にて。

右から2人目から故秋月老大師、故前角博雄老大師、筆者



1992年8月ロサンゼルス市の砂漠の奥の或山頂の座禅堂にて。

右から故秋月老大師、筆者

とができるかもしれない。また生命が、精神の段階で考えられる場合には、各個人の身体的自己の脳死によって取り出された臓器は、各個人の臓器という考え方を離れて、一般化、普遍化されて、他の精神に同一化して、再び物質的な臓器として役立つという風に、合理化されるのかもしれない。しかし、絶対無の開けにおいては、脳死による臓器移植をそのように考えることは不可能ではないであろうか。絶対無の開けにおいては、先の四つの思惟（即ち、相対有、相対無、絶対有、虚無）のパラダイムは直接には当てはまらず、「非思量の思量」としてのパラダイム（これが論理化されると、「絶対無のパラダイム」という実在の論理のパラダイムとなる）が妥当する。従って、脳死や脳死による臓器移植は、絶対無のパラダイムにおいては、例外としてのみ、しかも慈悲とか愛とか恩寵によってのみ承認され、あるいは、許されるのではないであろうか。その根拠を極く簡単に二つに分けて考えてみたい。一つは、絶対無の開けにおいては、物質は精神で、精神は物質である事実が露わとなり、「物質即精神、精神即物質」の事実が生じられ、直観される出来事の可能な開けでは、個的な身体的自己は世界であり、また逆に世界は身体的自己であると、また個的な身体的自己は個的な身体的自己である汝であり、個的な身体的汝は個的な身体的自己でもあると直観するからである。もう一つの根拠は、その開けでは、絶対の開けの働きである霊性（spirituality）が働いていると理解されるからである。この二つの根拠を、ここでそれぞれもう少し詳しく見てみたい。

まず第一の根拠であるが、簡単に言えば、「物質即精神、精神即物質」と、また同時に「私が汝で、汝が私」であり、また「私が世界で、世界が私」であると直観（体得、体認）される絶対の無限の開けは、心身が一如で、生死即涅槃と直観される世界である。そして、その直観は、「直接知」であり、いわば「無知の知」とも表現される知である。もし「私が汝で、汝が私」の事実が理解困難である場合には、例えば、溺死の我が子を目前にした親は自らの命以上に我が子の命を大切にするとする事実を思えば、この事実は容易に理解される。血が繋がっていないと言う反論があるかもしれない。しかし「心の自覚」が宗教と理解される時には、人類は心において一つに繋がっているのであり、血縁以上に、心の繋がりは深いのである。宗教においては、万物の心は一つである。また、「物質即

精神、精神即物質」の事実が理解困難な場合には、例えば友人や夫や妻の遺影は、物質ではあるが、そこには精神が一つに入っていることが、また形見の品には故人の心も一つに入っていることが、感受できれば事足りるであろう。更に、「私が世界で、世界が私」の事実が理解困難な場合には、例えば、戦争の真っ只中の人々は、戦争で漁夫の利を得ようという邪心が無い限り、戦争そのもののように不幸に生き、平和の真っ只中では、変人でも無い限り、平和そのものの人生を生きることになるであろうことを思えば、理解可能となるであろう。また、直観であるような無知の知は、知情意が分離していない、しかも主客の分離していない、いわば体でわかる知恵である。このような開けで、脳死によって、全人的な心身一如の人間の臓器が、何十にも何百にも、まるで機械の部品のように解体、分解されて、全人的な心身一如の他者に移植されることは、少なくとも、禅や日本文化の中では「自然」な（「自ずから然る」）出来事として受け取られることはできない。むしろ、非常に「不自然」な出来事と受け取られるのである。「人は死ねば無になるから、脳死の人の臓器を何十人もの人々に提供するのとは当然である」という意見には簡単には同意できないのが、筆者の現在の心境である。心身一如で、物質であるのみならず宗教的には万物の心と一である、個的な身体的自己が、脳死によって臓器を何十人もの人々に救いとして贈与できるのは、愛や慈悲においてのみ許され、法律の事柄ではないと考える。

3. 霊性の働きとしての、脳死による臓器移植

霊性は、古代ギリシア以来の伝統的な形而上学としての哲学の思惟や思索の三つの領域であった自然と人間と超越の次元とが、相互に絶対に断絶し、独立自全の領域でありながら、同時に三者が一である場合に働く「働き」であり、「力」であると理解される。何時の日か、人間の世界に働く倫理や法や法律が霊性にまで高められるならば、倫理や法や法律が愛や慈悲としての働きをなす日が訪れて来るであろう。私たち人間には、ただその日が訪れてくるであろうことを信じて、それに向かってただ努力することしか許されていないと考えられるのである。筆者は、人工臓器の今後の発展を心から願う者である。